

17世紀イタリアの作曲家ジョヴァンニ・バッティスタ・ファゾーロは、オルガン奏者としても活躍した。「望みを変えよ」は、優しいリフレインが印象的。

典雅な響きの有名曲「アマリッリ」は、ルネサンス末期からバロック初期にかけて活躍したイタリアの作曲家ジュリオ・カッチーニが書いたマドリガーレの一つ。声楽を志す人ならば、必ず歌う曲。

「側にいることは」は、17世紀後半のイタリアの作曲家ルイーダ・マンチャが書いたアリア。この曲は長らくサルヴァトル・ローザ作と言われていたが、近年の研究でマンチャのオペラ《幼き王》のアリアであることが判明した。

初期バロック音楽の作曲家ジローラモ・フレスコバルディは、特にその鍵盤曲で知られる。「トッカータ 第8番」は、1615年に出版された《トッカータ集 第1巻》所収。

アントニオ・チェスティは17世紀イタリアのフィレンツェで活躍したオペラ作曲家。「あこがれの人のまわりに」の悲しみにあふれた清冽なメロディは、イタリア古典歌曲のなかでも際立っている。

イタリア・パドヴァ出身の作曲家ジョヴァンニ・バッティスタ・バッサーニが書いた「眠っているのか、美しい女よ」は、報われぬ愛を歌っているが、どこか吹っ切れたような明るさがある。

ジュゼッペ・トレッリはイタリア盛期バロックの作曲家で、主に器楽曲で知られている。「あなたは知っている」は、シンプルがゆえに心をうつメロディ。

フレスコバルディの《パッサカリアによる100のバルティータ》は1637年に出版された改訂版《トッカータ集 第1巻》所収。非常に実験的な作品。

アントニオ・ロッティはヴェネツィアで活躍した盛期バロックの作曲家。「美しい唇よ、お前は言ったのだ」は、彼の代表作として親しまれていたが、近年はそのオペラやミサ曲なども再評価されている。

フランチェスコ・ガスパリーニは、ヴェネツィアのピエタ慈善院の合唱長も務めた人物で、作曲家としては教会音楽が多い。「いとしい絆よ」は短い曲だが、品のあるイタリア語が美しい。この曲が収められている「室内カンタータ集 作品1」は1695年に出版された。

アントニオ・カルダーラは、カール6世に仕え、ウィーンの宮廷副楽長にまでのぼりつめた人物。「たとえつれなくとも」は、牧歌劇《愛の誠は偽りに打ち勝つ》の中のカンツォネッタ。

イタリア・バロック音楽の作曲家ジョヴァンニ・バッティスタ・ボノンチー

ニは、チェロ奏者としても活躍した。「お前を讃える栄光のために」は、オペラ《グリゼルダ》のアリア。

フランチェスコ・ドゥランテは、イタリア後期バロック音楽の作曲家で、宗教曲の大家。教師としても名高く、パイジエッロやペルゴレージの師でもある。「愛に満ちた処女よ」とは、もちろん聖母マリアのこと。

鍵盤作品の大家として知られるナポリ出身のドメニコ・スカルラッティは、後半生をスペインの宮廷に仕えた。500 を超えるソナタを作曲しており、それぞれ3分に満たない曲だが、味わい深い。本日はソナタ3曲を演奏する。

清らかな旋律の「すみれ」は、ドメニコの父アレッサンドロ・スカルラッティ作曲のオペラ《ピッコとデメートリオ》のアリア。数多くのオペラやカンタータを残したスカルラッティは、オペラにおけるナポリ楽派の始祖とされる。

ヘンデルの歌劇《リナルド》は、1711年の初演で大成功を収め、ロンドンでのオペラ活動への活路を開いた作品。その第2幕の劇中でリナルドの恋人アルミレーナが歌うアリア「私を泣かせてください」は、静けさを湛えた旋律が胸を打つ名曲。

シャコンヌはバロック時代に流行した変奏曲の一種で、ゆったりした3拍子が特徴。ヘンデルが残したシャコンヌの中でも「シャコンヌ ト長調」(1710年)は人気が高い。21の変奏からなり、大きく三部分に分かれる。

イタリア・ナポリ出身の作曲家トンマーゾ・ジョルダーニが作曲した「カーロ・ミオ・ベン」は、イタリア古典歌曲のなかでも代表的なもの。歌詞はイタリア語だが、ジョルダーニはその生涯のほとんどをロンドンで過ごしたので、本曲もイギリス時代の作品である。

ジャン・ポール・マルティーニはドイツ出身のフランスの作曲家。「愛のよるこびは」は、日本でもおなじみのメロディだが、作曲家を知る人は少ないだろう。